
ライマの年越し舞踏会

zecczec

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライマの年越し舞踏会

【Zコード】

Z8530P

【作者名】

zecczec

【あらすじ】

年末のイベント、宫廷での舞踏会ですが、男装の麗人、王子付教
育係のラムールはちょっとだけ不機嫌です。

(前書き)

「ライマの初恋」から派生した別の未来の物語

1年も今日で終わりのこの日、テノス国では国王主催の年越しイベント、舞踏会が行われていた。

今年の舞踏会は例年以上に賑やかで来賓も多かった。その主役は、まず、一人。皇太子ディイ。

「おお」

ディイと隣国レイホウ皇女の見事なダンスに会場から感心した声が上がる。一人は息もぴったりにスロー・フォックストロットを披露していた。

「ほほう。我が息子、ディイにしてはなかなか上手いではないか、のう、ラムール？」
「レイホウ皇女に恥をかかせぬために、私がみつちりと教えました
故」

テノス国王と、褒め言葉をすべて使って使つても足りないと賞される王子付教育係の青年ラムールは共に並んでディイの姿を眺めながら微笑みあつ。

「おやおや、あつちも賑やかじやな」

国王がそう呟き、黄色い声が上がった場所を見ると、ラムールの表情が途端に固くなる。

その視線の先には、緩やかにカールのかかつた黒髪が腰まで伸びた青年が一人、女官や貴婦人達に囲まれている。
彼こそもう一人の主役。ラフォラエル。

白の館付の数学の教師であり、更にはライマという名の女であることを隠しているラムールの愛する夫でもある。

「うつわー、ラフォラエル先生、もてるねえ、せんせー」

ひと踊りして戻ってきた皇太子デイが、感心しながら呟いた。

そしてちらりとラムールに視線を向けるが、ラムールはデイの言葉をスルーし、「では私も踊つてしましようかね」と言い残して場を離れる。みんなの憧れであるラムールが来たものだから多くの女性が一曲のパートナーの座を求めてやつてくる。ラフォラエルを囲んでいた貴婦人の何人かも慌てて彼から離れるのを見てラムールはほんの少し嬉しそうな目をするものの、全員が離れる訳でもなく、いや逆にラムールが一人の相手と踊つている間は手が空くものだから、逆にラフォラエルに寄つていく少女達もいて。

ラフォラエルは紳士的に、かつ魅力的に、女達に対応してダンスをしていた。

ワルツの調べに身をまかせながら優雅に踊るラムール達を見て、みながウットリと、ため息をつく。

ラムールは涼しい顔をして踊つていたが、内心は当然、イライラしていた。

わかつてゐるけどさあ

ライマは視界の端でラフォラエルとそのパートナーのダンスを見ながら愚痴つた。

今回、ラフォラエルが第一の主役な訳。それはいわゆる【お披露目】である。

戸籍獲得プログラムによつてテノス国籍を得、しかも国の教育機関で数学の教師に大抜擢された彼。初めてのケースもあるし、また、この国の人々に受け入れてもらわねばならない。親睦を深

めるにはこの舞踏会はもつてこいだつた。

親睦を深めるのが目的だから、ラフォラエルも当然、猫をかぶつて社交的に振る舞つてゐる。しかし、なかなかの美青年、戸籍が無かつたという過去に少し影のある雰囲気、教師の腕としては一流、さらに独身、となれば、女性達が放つておくはずがない。それはまあモテモテになるのも当然で。今やラムールとラフォラエルはテノス国の中金イケメンコンビとロツクオンされていた。

奥さんとしては旦那さんが他の女と踊つてゐる姿を見るのはなんか腹立つつていうか

ライマとラフォラエルが結婚していることは国王と鍊金術師の佐太郎しか知らない。公表しようかとも考えたのだが、そうすると自分のことを女だとカミングアウトせねばならず、またラフォラエルが既婚者となると、やはり相手は誰だと詮索され、誰か明かせないとなれば、まだこの国に来たばかりの無国籍だった彼に不審を抱き、心を開かない輩も多いであろう。

だから結婚していふことは内緒にする方が良いのだ、といふのは、納得しようとするのだが。

無関心になろうとするのだが、やはり変な言葉が聞こえてくると冷静ではいられない。

「おおラフォラエルくん!! 私とも踊つていただきまますよーー!」

背筋に悪寒を思い起させる声は、第48部署の男色家、通称变态モグラ。やはりラフォラエルも彼にロツクオンされたようで、いつもは非常に冷たい対応をするラフォラエルであるが、今日ばかりは逆らえないのであろう、順番待ちをしていた変態モグラの手をとり、何故か女役になつて踊る。

「 もやあ、あ、 」

女役でのダンスなんて男のラフォラエルも慣れていないものだから、要所要所で微妙に間違つてしまつたのだが、その度にこそとばかり変態モグラがたまらなく嬉しそうにラフォラエルに密着する。そんな姿を見て、女官達は悲鳴を上げる。当然ライマも変態モグラを後ろからブン殴つてやりたいが、自重自重。ラフォラエルから気を反らせる為に自分が変態モグラの囮になろうかとも考えたが、おそらくそれをすると、ラフォラエルの方が先に切れるだろう。笑顔のまま、ぎりつゝ、と歯をかみしめた。

「 ラムール様？」

「 はつ？」

ふと気がつくと、今一緒に踊つているパートナーの女性が何か訴えたさそつにひびきを見上げている。

「 どうかしましたか？」

上の空だったことのお詫びも兼ねて極上の微笑みで尋ねると、その女性は嬉しそうに頬を染めた。

「 いえ、あの。ラストに踊るお方はもうお決めのかしら……って、気になつて」

ラストの相手。説明するまでもない今回の舞踏会のラストだ。最後に一曲、一番踊りたい者と踊つて、そして新年が明け、花火が上がり、今回の舞踏会はお開き、という流れになつていてる。

「 私は誰とも踊りませんよ。仕掛け花火の最終チェックをするた

めに一度外に出るつもりです」

その言葉を聞いた女性の顔が晴れる。どの女がラムールの最後の相手の座を射止めるのか不安だったのだろう。

「ラフォラエル先生はどなたと踊られるのかしら?」
「……わあ。彼のこととはよくわかりません」

あえて冷たく告げ、ラムールはそのままダンスを続け、一曲を終えて席に戻る。

最後の相手、かあ。ラフォーは誰からの申し出を受けるのかなあ

ぐるりと振り向いて、女宣と踊るラフォラエルを視界の端に入れる。
彼ならおさらべ深く考えず、順番でビンゴだった女性と踊るの

であろう。

最後の女性、は、特別な相手、といつ意味合いもあるのに。
だからライマはあえてその姿を見たくなかったので最後の一曲の時はこの場を去るうと決めていた。

「ネえ、ディ。センセーは、あの、新しく来た、ラフォラエルが嫌いなの力?」

ディの許嫁、レイホウ皇女が小声で尋ねた。

ディは心配そうにラムールとラフォラエルを交互に眺めた。

「んー。せんせーが最終面接してOK出したから、嫌いとか、そんなんじゃないと思うんだけど。ただ、まだ警戒してつのかなあ。何かラフォラエル先生が変な動きをしたら、即殺滅する気なんじやないかってのが、俺らみんなの予想なんだけど……」

「殺滅されるかもしだれない、つていうのにラフォラエルは堂々としてるナ」

「だろ？ すっげーよな。 ラフォラエル先生」

そんな二人のやりとりに聞き耳をたてながら、佐太郎と国王は視線をあわせ、複雑そうにラムールとラフォラエルを交互に見た。国民の間ではラムールはまだラフォラエルに心を許していない、と思われている。

実はただ、夫婦であることを隠しているだけなのだ。

「ラムールの無関心な態度は全くそういう意味ではないのじゃがなあ。 もつ少し仲良くしてもよいのに、あやつも不器用じや」

他の女と戯れる姿を見るのはさぞ辛かうつと思い、国王もあえてラストダンスでは、ラムールを引き留めるつもりはなかつた。

そして、時が過ぎ、次が最後の一曲、ラスト・ダンスだ。ディエ王子とレイホウ皇女をはじめ、おのおのが自分のパートナーと組み出す。

「ラフォラエル先生はどなた?」

進行役をしていたヤン教授が尋ねると、会場が好奇心でざわついた。 その会場の端にラムールもひつそりと立つている。 せめて、相手くらい知らないと、見ていない間に気が狂いそうだったから。

ラフォラエルは最初からそこしか見つめるつもりだつたとしか思えないほどの迷いのない仕草で、ひつそり立つていたラムールに視線をなげかけ、よく通る声を一言発した。

「 ラムール教育係」

「私が何か？」

ラムールことライマはとても事務的に返事をした。
ラフオラエルはつかつかとラムールに近づいて来る。

「 よりしければ、お相手を」

「 ……」

その一言にドヨッと会場が動搖する。

ラムールは差し出されたラフオラエルの手をとも無関心そうに見
た。

「 理解できませんね」

「 わたくしは、最後の相手は、もっと親交を深めてみたいと思つ方
をと、願つております」

ラフオラエルの瞳が真つ直ぐライマを射抜く。

「 わたくしが踊つてみたいと思つのは貴方だけです」

ほんの少しラムールは驚いたようにびくじと肩を動かした。

「 ただ、先ほど男性と踊つてみて分かったのですが、わたくしは女
性側のパートはいささか慣れていないので男性側で踊らせていただ
けるとありがたいのですが」

「 つまり私に女性側で、だと？」

ラムールの口調が強張り、会場の者達にも緊張が走る。 美しいラ
ムールは女のように言われるのが大層嫌いであることは周知の事

実である。だがその空氣を書き消したのは「トイ」であった。

「大丈夫だつて！せんせーは、俺のダンスの稽古中、ずっと相手方としてやつてくれたんだから、踊れるつて！ 余興！ 余興だつて、せんせー！」

「トイ」

眉をひそめるラムールに向かつて国王が更に続けた。

「そうじやな、余興じや、余興。どうせおぬしは誰とも踊る気が無かつたのであるつ。ならば、おぬしと踊れなくて困る者は誰もおらぬ。余興じや」

「陛下」

ラムールは目を閉じてため息をつくと、スッと顔を上げた。

「御意」

もうその眼差しにもつ迷いはない、いやそれよりも。

「但し、やるのであれば完璧に女性役に徹しますので」アーティ承を

そこにはいる全員が見とれるほど美しい笑顔を披露した。

ラフォラエールは嬉しそうに微笑み、スッと手を差し出し、ラムールはその手に自らの手をさしだし前に進み出た。

「音楽を」

陛下の指示で、音楽が流れ出す。そしてラムール達はゆっくりと動き出した。

それはとても息のあつた美しい動きで。

先ほど変態と踊った時に悲鳴を上げた貴婦人達も、まるで物語の挿絵のように美しい一人にうつとりと視線をそぞぎ、ほつゝ、とため息をついた。

「なんて美しい」
「お似合いだわ」

そんな声を聞いて陛下は小さく微笑み、「さあ、皆も」と促しそれぞれがそれぞれのパートナーと踊り出した。

「ラフォー、ダンス、上手い」

ラムールが小声でラフォラエルの耳元で囁いた。

「それは光榮だな」

ラフォラエルも嬉しそうに微笑む。

「ずっとライマとだけ、踊りたかった」

同じく、耳元で返す。

「私だつて、踊りたかった。 ラフォー、沢山の女人の人と踊るから……ちょっと妬いたんだから」

「馬鹿。 妬いてたのは俺のほう

「え？ だつて私、女人の人としか踊つてないよ？」

見つめ合いながら、二人はステップをふむ。

「それはそうだけど、ライマが女パートで踊ったとき、お前の相手つて一人だけだつたる？」

「え？」

「ディ王子と。 ハ子のダンスの練習のためとはいえ、ダンスをしたときに男役のパートナーがディだけつてのは、俺としては、妬くターンしながら、隙をみてラフォラエルの唇が軽くラムールのおでこに触れた。

「ばかあ」

赤くなりながら、ラムールは軽く抗議した。同時に、音楽が止み、証明が落とされる。

このまま外を向けば、新年を祝う花火が上がる。

会場にいる者達が一人を残して全員、外を向く。細い光の糸が地面から天へ向かって伸びていく。

花火が夜空に咲こうとしたその瞬間、ラムールの肩をラフォラエルの指がトントンと叩いた。

「？」

ラムールが向いたそのとき。

新年を祝う花火が鮮やかに明るく夜空を照らし、その光が会場の後方の壁に唇を重ねる二人の姿をだれに知られることなく浮かびあがらせた。

一人が唇を離すとほぼ同時に花火の音が会場に響きわたった。

「新年あけましておめでとう、奥さん」

音にまぎれてラフォラエルが告げると、抑えの効かなくなつたライマが思わず唇を彼に重ねた。

ほんのちょっとの間、一人は沢山のキスを交わした。

そして、そんな熱々の二人に気づいていた国王は、テノス国の講師は男色家揃いだと噂が立たなければいいなど、ちょっとだけ頭をかかえていた。

なにはともあれ、新年である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8530p/>

ライマの年越し舞踏会

2011年1月8日12時33分発行